<table>
<thead>
<tr>
<th>Title</th>
<th>志賀直哉『或る男、其姉の死』論 : 作品区分の再検討のために</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>モハンマド, モインウッディン</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td>語文. 106-107 P.84-P.97</td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td>2017-02-28</td>
</tr>
<tr>
<td>Text Version</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/11094/70986">http://hdl.handle.net/11094/70986</a></td>
</tr>
<tr>
<td>DOI</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>rights</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Note</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/

Osaka University
數百に上の作品がある志賀直哉の作家としての生涯は前・中・後期に区分されるのが通例であるが、いつかいつまでがどの時期に当たるのかについては記述はあまり見られない。例外的に平成二十三年に出版された『志賀直哉の『家庭』女中・不良・主婦』において古川裕佳はその前・中・後期として、初期（明治四十三年『白樺』創刊号に掲載の『網走まで』を発表してから、大正三年『鬼を盗む話』まで）を群を抜くにいたるまでの創作活動を再開してから、改造社版『志賀直哉全集』昭和十二年二十三年刊行によって編纂の『暗夜行路』を完結するまで、後期（昭和二十七年、戦後の昭和四十八年）に至るように明らかに時期を記している。が、その理由は述べられていない。

三区分が今まで色々な区分が試みられてきたが、日本近代文学大事典では小松秋五は高田瑞徳の区分説に賛成し、日本近代文学であると定義する。西垣の区び얄は三年の『城の崎にて』まで、期前に『回想する人』の時期の四区分について叙述している。一方、西垣勤は『戦う人』の時期（和解・調和の文学である）と定義する。西垣は三年の沈黙は大きな意味があり、この三年間をもってして志賀の文学は大きく変わるのであって当然の区分けということになる。強調する。西垣の区びしゃは作家の実生活が起こるのかという関係を指す。自然関連から『和解的自然関連』への変化と理解する。それに取り上げた区分の仕方には作品の内容よりも作者の実生活や、そこから多くの作品が生まれたことは周知の知くであるが、これからの分野にわたる作家群の区分の基準にすることは現在
彼と六つ上の妹
（明治四十三年九月）
（速夫の妹）
（明治四十一年十
月）

彼と六つ上の女
（明治四十三年九月）
（速夫の妹）

彼と六つ上の女
（明治四十三年九月）
（速夫の妹）

彼と六つ上の女
（明治四十三年九月）
（速夫の妹）
この小説は「和解」という四字熟語に対応する作品で、「和解」の内容については「言も発言されていない」ところが、二十六年後突然先の四字熟語どおりに書かれたことに対して、「次のような疑問が浮かんできること。「或る男、其女の死」を前提にした主婦の理を講じたのだろうか。そして、「和解」は実事、「或る男、其女の死」は事実と作り事との混合である。「和解」は事実、「或る男、其女の死」は事実と作り事との混合である。「和解」は事実、「或る男、其女の死」は事実と作り事との混合である。
や、「暗夜行路」の時任作との比較、
草稿類との比較、「暗夜行
路」草稿21」との類似性や夏目漱石
の影響への発言、
主人公の変貌や妹の「痣」の意味、
登場人物の反省などといった
視点から本作品は論じられてきた。
中で「兄の変貌」については、
主人公の「痣」存在についてはまたたく掏り取ることができ
ない」とのような性質のものには、
「弟」という語り手を
あえて設定して兄の反省を描いたこと、さらに自身の手紙を用
意したことを考えると、そこに「中」と「外」から「反省」
に自己を映す試みがあったことは疑えないだろうというような
言及されている。
富沢成実に指摘されたように、本作品に関する多くの研究に
おいては、ある男、その妹の死について「繰り返し語られた作
者自身の言葉をそのまま引き受け、
研究の前提としながらそれぞれの展開されたものが見られる。作者はいわゆる「解釈・調和」
にいたにもかかわらず、なぜこのような作品を書く必要
があったのかについて納得できる論考は見当たらない。作者の意
図について発言されても、繰り返しになるが、それらは作者が
創作余談」などにおいて言及したことを前提にしていると言え
るだろう。下岡友加の言葉を借りて言うと、本作品の設定は「作
いにっては実に都合のいい方法である」
り、この論考では作者が
くつかの機会で発言した内容から離れて作品世界に集中して、
代日本文学選集「解釈」はしかり（細川書店昭和二十三年八月、
原題は「作者の言葉」という宮
と子の不和を主人公の弟の立場で書いた。「妹」という架空の人
を出して、私実生活とは離れたものにしたが、父と私との
不和の心理だけは出ており、大切なことを意味するという
本作品においては「兄」と「弟」が主な登場人物として描か
ているが、「兄」は主人公で、弟はそれと観察する人物となっ
ている。以下、「このような考え方に基づいて考えていたい
指摘の口から彼の考えが表われることはなかなかったが、たまに弟に
言えるに至る。指摘は「作家の手紙において兄は自分の考え方を表わ
そのように」と、妹宛の手紙において別は自分の考え方を表わ
している。志賀直哉には主人公兄弟が登場する作品はおこないあ
「順三」などを見てみると、いずれの場合も主人公（一方では弟で
他方は兄である。）自身が語り手になっており、そばで観察する他の
主人公（兄か弟ずれの場合も、）という設定の例は、「咲る男
その女」です。

志賀の他の作品に見られる「兄」や「弟」は以下のようである。

«母は十数・で真行と云ふ私の兄を産んだ。それが三つで死ぬ
と、翌年の三月に私が生まれた。それきりで十二年間は私
で何か食はせたのが原因で、腹をこはし、死んで行った。

「流行感冒」上』

兄の存在の重要性については、最初に引用した「現代日本文学選
集「和解」はしがき」の中で「姉」については「架空の人物」と
示されているが、「弟」の場合はこのような修飾は使われてい
ないことからも言える。このように志賀の作品においては兄及び
弟という存在は珍しくない。この作品の場合も同様だが、「弟」は事
実上架空の人物だと言うべきだろう。他方、「和解」を含めて志
賀の他の作品では妹の登場も頗繁に見られ、主人公の日常生活に
バラン部位である上記の引用部からは両者の年齢の差や兄と兄は後
が結局生まれた。私はそれをいつものやさしくなかったのですか、
腹脹のどこかというとその出世後、私が自家の財産をつくる事にな
った者が塊張りこだわりに、何となく雲びにくいう気が
したのです。（三）

前略）姉は妙に邪推深い所もあったのです。（中略）兄の家
出たか、自分の出は別にとまとめられた事などから、それは全
く誤解で、純粋に父の意志から出した事なので、その裏で
母が私だけに家をつがせたいという考えから何かしているのでは？（母のことが夢に出てくる）

先程「父との関係に何が家出を帰してあるのは誤解だとする所」が言っているのに、ここでは兄の家出は「純粋に父の意志」によるものだと言う。両方とも弟の発言であるが、互いに矛盾しないということを認識しているとのこと重要な考えられる。このような認識がぼったかず、公平に兄の立場を観察することができるのである。

尚、両者間の性格はほとんど対象的に描かれている。「兄に結婚の話が持ち出された時、彼は父の介人が目指すのに対し、弟は「父の選択」を甘やかす」とある。「母は未だ早目と叱られましたが、反面弟が贅沢したことを父が持て観察できたと話し難い。

本作品において語り手の役割を果たす弟の登場の必要性について、彼が直面した諸問題について発言できたとは言えない。兄の行動が父に不快を与えられる場合が多いのに比して、弟の行動には不快を与えないケースが多いし、弟の結婚は父母の希望と一応合意できるとの提案がある。

本作品においては兄と父との不仲の関係が主な内容となっており、男性でない（時）のできない事柄（財産や家の継承など）が弟の欠点からも、男性の副主人公である「弟」の登場が不可欠なものになったと言えるのではないだろうか。

三、父子関係について

両者性格の問題の理解のために大変重要だと考え、本論においてもこれらに注目した。一から二十七にかけて見られる両者の結婚に関する話において、両者の間接的な衝突があったが、兄の言葉に対して父の反対が多く見られることから、父子間の問題の理解のために大変重要だと考え、本論においてもこれらに注目した。

一方、両者が直接的に衝突する場面は以下のようである。
この前、初めの衝突は、兄が夏休みに友達と奈良京都の旅をするからって、父に旅費を費やそうとした時でした。父は頭から怒り出してしまいました。旅し、電話でも何でも、何をしたかを見せて、旅費を費やそうとした兄のことを怒らして、頭から怒り出してしまいました。旅し、電話でも何でも、何をしたかを見せて、旅費を費やそうとした兄のことを怒らして、頭から怒り出してしまいました。

「前略」初めの衝突は、兄が夏休みに友達と奈良京都の旅をやろうとしていた時でした。父は頭から怒り出してしまいました。「前略」初めの衝突は、兄が夏休みに友達と奈良京都の旅をやろうとしていた時でした。父は頭から怒り出してしまいました。
弟

うるさの子たれんつ僕の手紙きてしあにの彼れ考響にあとこでるさが二ぬさ云とはうもい扱えとえとし家に立て居る事を痛切に感じた事がありませか。二十七から三十二に渡る（時に丸括弧の中で「作者云ぶ」のよう

や形式で弟の言葉を挿入されている）手紙は、兄の父に対する感情を最もはっきりかつ直接的に表すものとして見られる。仙田倫太郎は、これは兄の「最も私すべき内面告白が表されているもの言っている。手紙は「姉さんは他人から死ねばいいと思われ

ふ程、気持の悪い背景には「兄の実母の姉」の（前略）お父さん

するのに対して、父がそれら恐れなからもない様には怒らない。何でもかまね。断ってベーと雲ふ風に怒ったから兄

にも仕舞いたうとう本当に腹を立てました。（三十二）が、兄の、自分があ

非推は縄無に対する直接的な「非推」だったが、兄の、自分があ

たかも縄子のような扱いをされているという感じ方は、姉宛の手

手紙において書いた言葉「母上は実は立派な方と思って居ます。義

親において書いた言葉「母上は実は立派な方と思って居ます。義

の母上としてはこれ以上望めない所まで何時しても下さい。いま

り気をもれぬやうにと伝えたくださ。（中略）皆とのさい関係が父上との事の為めに犠牲になるのは悲し気します。」（三十二）から分かるように、兄の感じ方はひとえに父親のせい

母上にはくれくもよろしく。そして僕の出延に就いては余

で今まで出せなかったことを筆を通して述べている。作中

２十七から三十二に渡る（時に丸括弧の中で「作者云ぶ」のよう

な形式で弟の言葉を挿入されている）手紙は、兄の父に対する感

情を最もはっきりかつ直接的に表すものとして見られる。仙田倫

太郎は、これは兄の「最も私すべき内面告白が表されているもの言

いている。手紙は「姉さんは他人から死ねばいいと思われ

ふ程、気持の悪い背景には「兄の実母の姉」の（前略）お父さん

するのに対して、父がそれら恐れなからもない様には怒らない。何でもかまね。断ってベーと雲ふ風に怒ったから兄

にも仕舞いたうとう本当に腹を立てました。（三十二）が、兄の、自分があ

非推は縄無に対する直接的な「非推」だったが、兄の、自分があ

たかも縄子のような扱いをされているという感じ方は、姉宛の手

手紙において書いた言葉「母上は実は立派な方と思って居ます。義

親において書いた言葉「母上は実は立派な方と思って居ます。義

の母上としてはこれ以上望めない所まで何時しても下さい。いま

り気をもれぬやうにと伝えたくださ。（中略）皆とのさい関係が父上との事の為めに犠牲になるのは悲し気します。」（三十二）から分かるように、兄の感じ方はひとえに父親のせい

母上にはくれくもよろしく。そして僕の出延に就いては余

で今まで出せなかったことを筆を通して述べている。作中

２十七から三十二に渡る（時に丸括弧の中で「作者云ぶ」のよう

な形式で弟の言葉を挿入されている）手紙は、兄の父に対する感

情を最もはっきりかつ直接的に表すものとして見られる。仙田倫

太郎は、これは兄の「最も私すべき内面告白が表されているもの言

いている。手紙は「姉さんは他人から死ねばいいと思われ

ふ程、気持の悪い背景には「兄の実母の姉」の（前略）お父さん

するのに対して、父がそれら恐れなからもない様には怒らない。何でもかまね。断ってベーと雲ふ風に怒ったから兄
彼はこの考えを「不愉快ですから」、「直ぐ自ら打消したつもり」だったにもかかわらず、篤の考えに捉えられているように思われた。兄の家出の時に父が「随分淋しい気持ちになったらしいの」で「二十八」ことに注意していた。「母は嬉しく、目の前のような愛情があるのに対して、父の言動からは父親らしい愛情よりも家の名誉が重要だったことが窺える。

「命拾い」以上です。十一月、恐らく十一月のものは実際に场合でした。それが僕に来たのです。「中略」所が同時に出うふ人が確かにあれば、どう僕は感じたのです。然し此考は不愉快ですですから僕は直ぐ自ら打消したつもりでした。二十丸九場で

「中略」恐らく父上の僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上の僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「中略」恐らく父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？

「前略」父上が僕に今は何も望んでいらないのでは？
いて兄は一寸驚いたやさな顔をしました。そして父の顔をちっ
と見つめました。父は幾分悲を落としましたが、彼女たち
一緒には気なく顔を外してしまいました。／兄は直ぐ又祖母の部
屋へ引きかえて行きましたが、少しして私が彼を呼ぶと、兄
は黙って泣いて居ました。／九。彼は予想もしていなかった父
の言葉やその瞬間の父の態度から今で見ることのできなかった
父親らしい愛情を感じ、涙を流したのである。ここからは兄が父
からの愛情をどれほど期待していたかが分かる。しかしながら、
父親の状況感が表現が持続的でないのはこの時だけではなかっ
た。

（前略）父は北の或る地方に新しく農場を買った。それを見
にゆくのに兄を誘いました。兄は前から父に対し自分の現した様子が
喜びました。兄は前から父に対し自分の現した様子が
余りに粗野であった事を恥じてゐた時でしたから、心から父
の誘ひを喜んで居ました。／そして二人が出発の時、私は上
野まで送って行きましたが、父は自身は二等車に乗り兄は二
等車に乗せて同じ列車で別々に行ったのは二寸驚きました。

（十三）

傍線部の兄が自身の父に対する態度を後悔していることは注意
すべき点である。彼は父の一歩歩が許されたことを心から喜
んでいる。彼の後の父の行動を兄はどのように受け止めえたのだ
ろうか。弟は「父にも兄を本音に愛する事が出来たら如何にいい
だろうと云ふ気はあるに違いないのです。が、擬人二顔を突き合

以上に見てきたように、この作品では主人公である兄が自分の
愛はない。の言葉を聞いた事で非常に動揺した兄は、自身が
願っていた父の愛はもう享受することが出来ないと思い込み、あ
のような手紙を妹に書くに至ったと言えよう。
大きな作者が、「（前略）」と子の不和を主人公の弟の立場で書いた。中略、弟が強く反対を含むながら、批判的に書いたという「仮想の主人公」という立場を与えられている。弟は愛を大切に語っている。

伯母の言葉は父に対する兄の疑いを決定的なものにし、兄に歯をついていく衝撃的で非常に苦しむを与えた。の内を大いに語っているのは結局自身が書いた手紙であり、弟の心を傾向に細長い手紙において吐き出すが、それによって心の内葛藤がどれほど解消されたかは分からない。伯母の言葉は手紙を書き動機となったと言え、この言葉はただ、彼らが想っていた父の愛の享受の不可能性をも確信させたと言えよう。

「（前略）」と「（後略）」といった小説と対になる作品は、ただの作品ではない。両スタイルが違う点から考えると、「（前略）」と「（後略）」の考察では、両作品のスタイルが違うから考えると、「（前略）」と「（後略）」の考察では、両作品のスタイルが違うから考えると、「（前略）」と「（後略）」の考察では、両作品のスタイルが違うから考えると、作家の中では父子の軋轢の関係が明らかに描かれていることが推察できる。このように、「（前略）」と「（後略）」の発表の後は「調和の時期」の志賀の作品には調和が描かれていなかった。
大正六年五月発表の『城の崩壊』における『自極』から昭和三年に
は私には矢張りなくてならぬ物だと云ふ意味で認めてゐる
と記しているが、これにおいても『あとかし』を述べたような表
現『不和の事實』についてこの作品に『丹念にその原因を追及し
て寄っているからである』と言ふ発言をしてゐた。ただ、『此
作品は私には矢張りなくてならぬ物だとは思ふ』たが、『あとかし』
において記した内容を示唆しているわけではないとしても言ふべきで
ある。故に本書の基本に
はやはり『自分』自身の顕著な自立心中的態度が深く関って
ゐる』と考へてゐる。（14）

昭和十三年六月の『続創作余談』においては『或る男、其姉
の死』これは『和解』の後に書いたものだが、作の内容から見
ば『和解』の前に入るべきものだ。『和解』は現実のstoff
に関係をなしで時にかく郎然と書くが、この作品は少しく陰気
の点が、愉快な作品でないから、私は余り愛著を持たないが、書く
時には、相当悔やまれるやうに記憶する。好みでなくとも、此作品
における時

方を一旦例を挙げた上では、『或る男、其姉の死』論の與
との関係を中心に『或る男、其姉の死』論。本同為に昭和十八年
と記しているが、これを証の原稿として『或る男、其姉の死』論
は、昭和十八年十二月に『暗夜行路』との比較は中村完人は『暗
夜行路』とは異なり、『或る男、其姉の死』論は『日本近
代文学』二編昭和五年十月、や西山康、庄司達也

志賀直哉『或る男、其姉の死』の語り手。論文十二
月日を参照。（15）

昭和三年四月に『論文十二月日』に於て挙げたーと原稿を挙げた上
では、『或る男、其姉の死』論の與ととの関係を中心に『或る男、其姉の死』論。本同為に昭和十八年
と記しているが、これを証の原稿として『或る男、其姉の死』論
は、昭和十八年十二月に『暗夜行路』との比較は中村完人は『暗
夜行路』とは異なり、『或る男、其姉の死』論は『日本近
代文学』二編昭和五年十月、や西山康、庄司達也

論文十二月日を参照。（15）
前に、池内輝雄「志賀直哉の領域」に収録されていて、氏は夏目漱石「こころ」の影響に従って指摘されるが、冨沢成実「志賀直哉」の男其姉の死論を主人公の変貌をめぐって実行者、「明治大学教育論集」四百四巻、平成十八年三月。